

一乗釈と『教行信証』の課題

藤 元 雅 文

はじめに

親鸞は、『顕浄土真実教行證文類』（以下『教行信証』）「行巻」の一乗釈に「誓願一仏乗」をもって、自らが出遇いた教えを示し表す。誓願一仏乗の開頭は、『教行信証』全体を通しての課題であると言えるが、その言葉が実際に言明される一乗釈の御自釈は、何をどのように明らかにしているのか。また、その後につづく『涅槃経』『華嚴経』の引文によって親鸞は何を示し表そうとしているのか。その内容を尋ねながら、誓願一仏乗を開頭するという課題が、『教行信証』に展開される課題とどのように関わっているのかを考察していきたい。

一、一乗釈における御自釈と『勝鬘経』、『一乗要決』

親鸞の一乗釈御自釈の文は、従来、二つの典拠が指摘されている。その一つは、『勝鬘経』「一乗章」の文であり、もう一つは、源信が『勝鬘経』「一乗章」を乃至しながら引用する『一乗要決』「大文第八」の箇所である⁽³⁾。但し、書名を挙げ、「已上」などの表記で締める引文の形をとっていないのであるから、典拠と指摘されるものと、『教行信

証」における一乗釈御自釈の文とがどのような関わりにあるかは、考察しなければならない課題である。

『勝鬘經』は、『法華經』と共に「一乘」の教えを説き明かす經典であり、また一乗の教えを如来藏思想によって基礎づける書として知られている。また日本の仏教史においては、聖徳太子が推古天皇の前にて講説した經典としてしばしば特筆され、聖徳太子の作と言われる『勝鬘經義疏』が現存するなど、重要な位置づけを持つ經典である。更に親鸞自身、この内容を和讃に詠つてもいる。⁽⁵⁾

その『勝鬘經』「一乗章」の文と、「行卷」一乗釈の文との相違について、まず押えておきたい。

① 一乗釈の冒頭にあたる箇所は、『勝鬘經』には「聲聞緣覺乘皆入大乘。大乘者即是佛乘。是故三乘即是一乘。得一乗者。得阿耨多羅三藐三菩提。」となっており、一乗釈には「聲聞緣覺乘皆入大乘。」「即是」、「是故三乘即是一乗。」の文言がない。

② 『勝鬘經』では「阿耨多羅三藐三菩提者。即是涅槃界。」となっているが、一乗釈では「阿耨菩提者。即是涅槃界。」となっている。

③ 『勝鬘經』では「涅槃界者即是如來法身」であるが、一乗釈では「涅槃界者即是究竟法身」である。

④ 『勝鬘經』では、「得究竟法身者。則究竟一乘。究竟者即是無邊不斷」とあるが、一乗釈では「究竟一乗者即是無邊不斷」である。

⑤ 『勝鬘經』には「無邊不斷」に続いて「三帰依」についての経言が説かれるが、一乗釈には、その箇所は一切記されない。

⑥ 『勝鬘經』には「三帰依」についての経言の後「若如来隨彼所欲而方便説。即是大乘無有三乗。三乗者入於一乗。一乗者即第一義乘」と説かれるが、一乗釈では「若如来隨彼所欲而方便説。即是」の文はなく、「大乘無有二乗三

乗。二乗三乗者入於一乘。一乗者即第一義乗」となっている。

このように一乗釈と『勝鬘經』「一乗章」の文とは、意味内容に深く関わる文言を含めて大きな相違がある。そもそも引文の形をとっていないのであるから、一乗釈御自釈は親鸞自身の思想的内実を明らかに表明している箇所にはかならない。しかしそれと共に『勝鬘經』の經言との、言わば緊張関係から、親鸞の聞思の営みを明らかにする手がかりが得られよう。これについては、御自釈の文言を考察する際に、触れることとする。

次に、一乗釈御自釈のもう一つの典拠と指摘される源信の『一乗要決』について見ておきたい。

『一乗要決』の課題は、その冒頭に明記されるように「法華に依りて、一乗を立て」、宗の執われを離れ、經論の言説、道理の料簡をもつて、一乗真実を明らかにすることにある。特に「三乗真実」「五姓各別」の説に基づき、定性二乗と畢竟無性は決して成仏できないとする法相宗の主張に対し、源信は詳細に經論の言葉を挙げ、料簡問答を重ねて反論していく。その思想的な言説は日本の仏教史において非常に重要な意義をもつものであり、比叡山延暦寺で学んだ法然や親鸞が、この書物の内容に精通していたことは十分に考えられる。但し源信が『一乗要決』に『勝鬘經』「一乗章」の文を引用するのは、『法華經』以外の余經において、「一乗真実」を証しすることを目的としているのであり、それはとりもなおさず法華一乗が真実であることを助成するためである。それに対し、一乗釈御自釈の文言は、一乗の内実を明らかにする不可欠な言葉として刻み込まれている。つまり『一乗要決』と『行卷』一乗釈では、文言に託されている課題の違いが存在していることをしっかりと理解しておく必要があると考える。

その上で、『一乗要決』に引文される『勝鬘經』の文言と一乗釈御自釈との相違を確認しておきたい。

①一乗釈の冒頭にあたる箇所は、『一乗要決』の引文には「聲聞緣覺乘皆入大乘。大乘者即是佛乘。是故三乗即是一

乘。得一乗者。得阿耨菩提。」となっており、一乗積には「聲聞緣覺乘皆入大乘。」「即是」、「是故三乘即是一乗。」の文言がない。（『勝鬘經』との相違において指摘した①と同一）

② 『一乗要決』の引文では、「得一乗者。得阿耨菩提。」となっているが、一乗積では「得一乗者。得阿耨多羅三藐三菩提。」である。

③ 『一乗要決』の引文では「涅槃界者即是如來法身」であるが、一乗積では「涅槃界者即是究竟法身」である。（前出の③と同一）

④ 『一乗要決』の引文では「得究竟法身者。即究竟一乗」であるが、一乗積では「得究竟法身者。則究竟一乗」である。（『勝鬘經』は、「一乗要決」とは異なり、一乗積と同じ「則」である）

⑤ 『一乗要決』の引文では、「究竟法身者。即究竟一乗。究竟者即是無邊不斷」とあるが、一乗積では「究竟一乗者即是無邊不斷」である。

⑥ 『一乗要決』の引文では、「無邊不斷」につづく「三歸依」についての経言が引文されず、「乃至」の文字が記されるが、一乗積では「乃至」の文字はなく、「三歸依」の経言もない。

⑦ 『一乗要決』の引文では「乃至」の次に「若如來隨彼所欲而方便説。即是大乘無有二乗。二乗者入於一乗。一乗者即第一義乗」と説かれるが、一乗積では「若如來隨彼所欲而方便説。即是」の文はなく、「大乘無有二乗三乗。二乗三乗者入於一乗。一乗者即第一義乗」となっている。

以上の内容から特徴的なことをまとめておこう。まず、④に指摘されるように、『一乗要決』よりも『勝鬘經』に近い言葉遣いが、一乗積に見られることがわかる。また、⑥に示されるように『一乗要決』の「乃至」の箇所が、一乗積に記されない内容と重なる部分がある。けれども、⑦を見ると分かるように、その箇所が完全に一致しているわけ

けではない。以上のことを踏まえると、法住が語るように『勝鬘經』ではなく『一乘要決』の引文のみを、この一乗の典拠と考えることはできないと言えよう。更に推測を重ねるなら、親鸞は『勝鬘經』の經言と『一乘要決』の思想的課題を踏まえて、その文言を吟味し、その上で、引文という形をとらずに、一乗の文言を書き記していると言えるのではないか。

いずれにしろ、一乗は、『勝鬘經』の文言を換骨奪胎し、『勝鬘經』の思想的な背景からは独立した形で、誓願一仏乘の意義を明らかにする、一言一句欠くことのできない文言として『教行信証』に刻み込まれていると言うことができる。

二、一乗御自釈の意義について

では、その一乗御自釈の内容を見ていきたい。

言一乗海^ト者一乗者大乘^ハ大乘者佛乘^{ナリ}(9)

この一乗釈冒頭の御自釈の意義をどのように理解すれば、よいであろうか。

親鸞は、『教卷』において『大無量壽經』に明らかに教えを「一乗究竟の極説」⁽¹⁰⁾と述べ、更に『行卷』には、元照や慈雲など諸師の釈を通して、本願の念仏に開かれる教えこそ一乘法であることを明らかにしている。具体的には元照の『弥陀經義疏』にある

一乗極唱終歸咸指^ヲ於樂邦^ニ。萬行圓修最勝獨推^ヲ於果號^ニ。

の文を引き、『華嚴經』、『法華經』、『涅槃經』など一乗の教えを高く掲げる經典は存在するが、その「終歸」ついに歸す所は浄土の教えであり、阿弥陀如来の尊号に明らかになる法であることを示す。これは本願念仏の仏道を、全ての教えが最終的に歸す最も勝れた「一乗究竟」の教えとして明かす言葉である。更に、元照の引文では、

大智唱^{トナヘテ}云圓頓一乘^{ナリ}純^{ニシテ}無^ニ雜^{シト}
(12)
上巳

と、あらゆる功德が円かに満ち、すみやかに生死の迷いを超えていくことを実現する一乗の教えは、「純一無雜」つまり、それ以外の何ものも雜することのないただ一つの教えであることを明示している。

そうすると、「行巻」の一乗釈とは、大行を顕らかにする「行巻」全体の展開を踏まえつつ、特に諸師の言明を一つの起点としながら、更にその道理を深く掘り下げて明らかにしている箇所と言うことができよう。

以上のことを受けて、一乗釈御自釈の冒頭の箇所を精読するために、ここで留意しておきたいことがある。それは、先ほど『勝鬘經』あるいは『一乗要決』との相違において指摘した冒頭の文言についてである。もう一度、『勝鬘經』「一乗章」と一乗釈の違いについて確認しておこう。

『勝鬘經』：聲聞緣覺乘皆入大乘。大乘者即是佛乘。是故三乘即是一乘。得一乘者。得阿耨多羅三藐三菩提。

「一乗釈」：大乘者佛乘^{ナリ}得^ニ一乘^ヲ者得^ニ阿耨多羅三藐三菩提^ヲ

このように一乗釈には「聲聞緣覺乘皆入大乘」、「即是」、「是故三乘即是一乗」の文言がないが、この相違は、何を示唆しているのか。

ここでの『勝鬘經』の文意は、「声聞、緣覺の二乗は（最終的に）すべて大乘の教えに帰入することになる。その大乘とは仏乗のことにほかならない。だから、三乗の教えはとりもなわず一乗の教えにはかならないのである」ということである。親鸞は一乗釈御自釈の最後に、「二乗三乗者入^ハ於^ニ一乗^ニ」と明記しているから、「声聞、緣覺の二乗が皆一乗に入る」ことを説き明かす経言は、一乗釈の内容と相違するものではない。そうであるならば、ここで大きな課題となる言葉は、「三乗即是一乗」という文言であると考ええる。

そのことを明らかにする手がかりとして、法然、親鸞当時、この『勝鬘經』の文がどのように受け取られていたのかを見ておきたい。殊にこの「三乗即是一乗」という経言に対しては、親鸞が法然門下にて共に聞法し研鑽を積んだ

と考えられる證空の言及が残されている。法然の明らかにした専修念仏の仏道こそ「一乗」一教の内実を有するものであるという領きをもち、それを明らかにしようとする門弟として、親鸞と共に、證空、幸西、隆寛等をあげることができるが、その中で證空が、この『勝鬘經』の一乗章の文言をどのように理解しているかは親鸞当時の思想を考へる上で大きな手がかりとなる。更に、證空には禪林寺に蔵されている『一乗要決』の手沢本があるとわれ、彼が「弘願の一乗」を究明する中に言及する「三乗即是一乗」という言葉の理解は、親鸞の一乗釈との緊張関係において注目すべき思索であろう。

證空が『勝鬘經』に言及する箇所は、弘願一乗を考察する際に記される次の問いの中にある。

問曰。諸教習。一乗者。佛乘也。佛乘者。實相理也。實相一理。凡聖無隔。仍一乘也。今法華十方佛土中。唯有一乘法云。勝鬘經。大乘者。即是佛乘。是故三乘即是一乘云。此等諸經皆以實相一理云一乘。今師何以弘願之一行立一乘哉。若弘願立一乘。又許實相立一乘。二乘謂。一乘義破云何。

〔觀經疏他筆鈔〕・『西山全書』第四卷 二七一頁

この問いは、諸教において一乗は「実相の一理」つまり諸法実相の理を言うのであって、「弘願の一行」を一乗と立てることはなく、敢えて弘願を一乗と言うなら、諸法実相の理と並立して、二乗を立てることになってしまい、一乗の義を破してしまうことになるのではないか、というものである。この問いに対する證空の応答については詳論しないが⁽¹⁴⁾ここで注意しておきたいのは、「実相の一理」を証する経言として、『法華經』の「十方佛土中。唯有一乘法」に続き、『勝鬘經』の「大乘者。即是佛乘。是故三乘即是一乗」の文言が記されていることである。つまり、『勝鬘經』における「三乗即是一乗」の文言は、天台宗における「諸法実相」の理を端的に証しする経言として捉えられているのである。

證空の教学においては実際の求道では、すべての衆生が斉しく生死を超える正因は弘願の一行にほかならないと明

かされる。その上で、證空は、天台宗の開会という思想を援用し、弘願一乗の教えを成就した上は、諸經に明かされる一乗、三乗の教えはそれぞれに説かれる意義を持ち、それぞれが弘願の一乗を明らかにするのであると述べる。つまり證空にとつて、「三乗即是一乗」の文言は文字通り「三乗の教えがとりもなおさず一乗の教えにほかならない」ことを記すものであり、三乗と一乗とが矛盾することなく成り立つことを教え示す經言として受けとめられる。また、この三乗と一乗との関係が『法華經』に基づく諸法実相の理に裏付けられる点から言えば、證空が『法華經』と『勝鬘經』を並べて引用していることもよく理解できる。

證空における弘願一乗の究明の姿勢は、以上のように弘願一乗の教えと、それ以外の諸經の教えにおいて開会という視点に立って明らかにするものである。親鸞が、誓願一仏乗の開顕を課題とする『教行信証』において、なぜ『法華經』を引用しないのかという問題を考える時、この證空の思想は、大きな視点を示唆してくれているのではないだろうか。證空のように、『法華經』と『勝鬘經』を、「諸法実相の理」を明かす教えとして理解する背景が存在していることを考えると、「一乗」を明らかにする箇所で、『勝鬘經』という經典の名を出すことなく、また『法華經』の「実相の理」を端的に教示する「三乗即是一乗」の經言にまったく言及することがない親鸞の姿勢は、證空が援用した天台における「諸法実相の理」に対する一貫した批判吟味の視座を表している。

以上のことを踏まえると、「言一乗海イハ者一乗者大乗イハ大乗者佛乘イハ」とは、一乗こそ、大乗と呼ばれるべきものであり、大乗とは、仏乗として明らかにされるほかないのであるという親鸞の宣言であり、「諸法実相の理」を掲げて一仏乗を基礎づけようとする思想に対する明確な批判吟味の内幕を持つ思想的な表明として受けとめることができる。従つてこの端的な表現は、当時の仏教界あるいは法然の門下の様々な思想的な展開との緊張関係の上で、親鸞の思索を凝集的に表わしたものと云いうるのである。

その上で親鸞は「一乗を得る」とはいかなることかについて次のように展開する。

得^ル二乗^ヲ二者得^ニ阿耨多羅三藐三菩提^ヲ阿耨菩提者即是涅槃界涅槃界者即是究竟法身得^ニ究竟法身^ヲ者則究^ニ竟^{スルナリ}
 乘^ヲ无^ニ異^{コト}如來^ヲ无^ニ異^{コト}法身^ヲ如來即法身究^ニ竟^{スル}一乘^ヲ者即是无邊不^ニ斷^{ナリ} (15)

ここで親鸞は、一乗を得るとは、すべての仏教徒の課題である如來のこの上ない智慧つまり阿耨多羅三藐三菩提を得ることであり、その阿耨菩提とは涅槃界であるとまず述べる。涅槃界とは「无明のまどひをひるがへして、无上涅槃のさとりをひらく」⁽¹⁶⁾さかいである。この涅槃界とは、究竟法身、つまり仏のさとりを究め尽くした法身であると明かされ、この究竟法身を得ることが、一乗を究竟することにほかならないと、親鸞は続ける。

この親鸞の思索の意味を明らかにするためには、親鸞における仏身の理解を見ておく必要がある。このことについては、別に論じたことがあるが、再度考察していききたい。

親鸞は『愚禿鈔』において、仏(身)を以下のように記す。

・就^テ佛^ニ有^リ二四種^ニ
 ・一^ニ法身^ニ ・二^ニ報身^ニ

・三^ニ應身^ニ ・四^ニ化身^ニ

・就^テ法身^ニ有^リ二三種^ニ
 ・一^ニ法性法身^ニ

・二^ニ方便法身^{ナリ}

・就^テ報身^ニ有^リ二三種^ニ
 ・一^ニ彌陀^ニ ・二^ニ釋迦^ニ

・三十方

・就^テ應化^ニ有^リ二三種^ニ
 ・一^ニ彌陀^ニ ・二^ニ釋迦^ニ

・三十方⁽¹⁸⁾

ここで四種の仏身中、報身、応身、化身の三種については、彌陀、釈迦、十方(諸仏)それぞれが有する仏身として親鸞は捉える。しかし、法身については法性法身と方便法身という二種を以てその内容を示すのみである。

もとより、法性法身とは、仏陀を仏陀たらしめる根源である所の真如・一如を指し、方便法身はその真如の具体的根源的な動態を指す言葉と捉えられる。言い換えるなら、「いろもなし、かたちもましまさず、こころもおよばれず、ことばもたえたる」法性法身が、いろ、かたちをもつて、現れたすがたを、方便法身と言うのである。

そうであるなら、一乗釈における「究竟法身」という言葉についても、まずもつて、あらゆる仏を仏たらしめる根源を示す言葉として捉えることができるであろう。法身そのものが仏（身）の根源を表現したものであり、その意義をより明確化し、「究竟法身」と表現されていると考えることができるのではないか。そのように考えることができるならば、あらゆる仏を根源的に仏たらしめるはたらきとは、あらゆる仏を生み出す根源であり、更に言えば、あらゆる衆生を成仏させることを最も根底から支えていることになる。従つて、究竟法身を得るといことが、とりもなおさずあらゆる衆生を斉しく成仏させる一乗の教えを究竟することとなるのである。

更に、親鸞は

无マシマサス 異コト 如来マシマサス 无コト 異コト 法身ハ 如来ナリ 即法身

と明らかにする。これは、あらゆる仏を生み出す究極的な根源においては、異如来、異法身はましますことなく、あらゆる如来はすべて究極的な法身から現れるものであり、その意味で如来は法身と別にはないことを示すものである。その上で、

究スル 一乗ハ 一者ハ 即是ナリ 先邊ナリ 不斷

と示し、あらゆる衆生を区別なく斉しく成仏させる一乗を究竟するということは、そのはたらきが、十方の世界に充ち満ちて際限なく（無辺）、しかも過去より未来際を尽くして断えることがなく存在する（不斷）ことであると明らかにする。

一乗を得るとは、仏を仏たらしめる根源的なはたらきである法身を得ることであり、その道理を、以上のように究

明する親鸞は、更に

大乘^{ハ、シ}先^ニ有^{コト}二乗^ハ三乘^ニ二乘^ニ三乘者^{ハ、ラシメムトナリ}人^ニ於^ハ一乘^ニ一乘者^ハ即^ハ第一義乘^{ナリ}唯是誓願一佛乘也

と記し、一乗、仏乗と明らかにされる大乘には、二乗、三乗の教えは存在せず、換言すれば、一乗と、二乗三乗とが矛盾なく共に成り立つということはありえないことを明示する。その上で、声聞乗、縁覚乗、菩薩乗の教えは全て一乗に帰入させるために説かれたのであり、一乗の教えこそが比類なきもつとも勝れた教えにほかならず、それは唯一誓願一仏乗としてのみ実現しうることをここに宣言するのである。この「誓願一仏乗」の宣言は、一乗釈に展開される「阿耨菩提」「涅槃界」「究竟法身」「究竟一乗」「無辺不断」の内実が、本願の仏道の道理によつて、実質をもつて一切の衆生に成就するものであることを開き顕わしているのである。

本願の道理と一乗釈で言及される内容を詳細に究明することは、『教行信証』全体、更には親鸞のすべての著作に亘つて明らかにしなければならない課題であるが、ここでは一乗釈において言及されている法身と本願についての親鸞の思索を確かめておきたい。

親鸞は『唯信鈔文意』において一如・法身の根源的動態としての本願の意義を明らかにして「この一如よりかたちをあらわして、方便法身とまふす御すがたをしめして、法藏比丘となりのたまひて、不可思議の大誓願をおこしてあらわれたまふ御かたちおほ、世親菩薩は盡十方无寻光如来となづけたてまつりたまへり。」⁽¹⁹⁾と述べる。法性法身がかたちを現し御なをしめして、一切衆生にはたらきかける躍動的な法身の動態として本願の主体である法藏菩薩を親鸞は推究する。またこの言葉につづけて「この如来を報身とまふす、誓願の業因にむくひたまへるゆへに報身如来とまふすなり」⁽²⁰⁾と展開し、本願の主体である法藏菩薩が本願に報い阿弥陀如来として成仏していく教説の意義を法身のはたらきとして聞思していく。これは、本願の発起と本願の成就をあらわす如来を、十方諸仏の中の一仏としてではなく、「あらゆる仏を仏たらしめる法身の根源的なたらき」として明かし、一切衆生に無邊不断にはたらき続ける、

大悲誓願の業因に報いた報身如来として究明していくものである。この本願と法身についての親鸞の思索によって、一乗釈御自釈において言及された表現が、その内実を本願の道理として実現するものであることを私たちは徹底して聞き開いていかねばならないであろう。この考察については、これからの課題としたいが、大乘仏教の根本課題である一乗の道理を深く掘り下げながら、本願の意義をその根源にまで遡り究明する親鸞の思索によって、一乗釈は表されておき、そのことを踏まえて、次の引文の考察に移ることとする。

三、一乗釈における『涅槃經』と『華嚴經』の引文について

それでは、一乗釈御自釈の後に続く、『涅槃經』の四文、『華嚴經』の一文を見ていきたい。

『涅槃經』言善男子實諦者名曰大乘非_二大乗_一者不_二名_一實諦_ト善男子實諦者是佛所說非_二魔所說_一若是魔說非_二佛說_一不_二名_一實諦_ト善男子實諦者一道清_{ニシテ}淨_{ニシテ}先_ニ有_二二_一也_上 (21)

親鸞は、「誓願一仏乗」を明らかにする文脈で、なぜこの文を引用するのか。この引文において注目されるのは、實諦、大乘が仏の所説に明らかになる事柄であり、それは清浄なるただ一つの道であるという誓願一仏乗の内実を、「魔の所説」に対する形で言明している点である。

『教行信証』において「魔」の課題は、「化身土巻」後半に展開される。ここでは、例えば「度律師云魔即・惡道所收_{シユナリト}」⁽²²⁾と述べられ、更に「源信依止觀云魔者依煩惱_{ルナリ}而妨_ニ菩提_ニ」⁽²³⁾と記されるように、魔とは、人間を惡道に沈み込ませるもの、煩惱に依って、人間に生死の迷い苦しみから超えるあり方をさまたげ続けるものを意味する。親鸞は、ここで「魔説」に対する具体的な批判吟味はしていないが、「實諦者是佛所說非_二魔所說_一」⁽²⁴⁾という言明によって、一乗として明らかにする本願の教えは魔説に「非」という一字によって対峙する関係にあるということを示しているのではないか。つまり、「清浄なる一道」とは、「魔の所説」に対し「非」として明らかにしなければならない質

の事柄なのである。

そうであるならば、この『涅槃經』の引文は、誓願一仏乗の開頭が「化身土卷」における魔という問題性までを明らかに見据えて課題とされている親鸞の視座を教示するものとして理解されなければならないだろう。

次に『涅槃經』からの第二の引文を見ていきたい。

又言云何 菩薩信順一實菩薩了知一切衆生 皆歸一道 一道者謂大乘也、諸佛菩薩爲衆生故分之爲
三是故菩薩信順不逆⁽²⁴⁾

この文は、菩薩が「一実に信順すること」と「不逆に信順すること」という二つの視点で、一乗と三乗との関わりを明らかにしている文である。つまり、一切衆生を一道に帰入させることを菩薩がはっきりと知ることを「一実に信順すること」であると明確化し、その上で、諸仏菩薩が、衆生のために、一乗を分けて三乗を説くこと、これを「不逆に信順すること」と述べているのである。

「不逆」という言葉の意義については、先ほどの『勝鬘經』「三乗即是一乗」に対する親鸞の姿勢を踏まえると明らかになるであろう。つまり、衆生のために、一乗を分けて、三乗を説くという内容こそ、「不逆」であると明確化する意義は、「三乗即是一乗」、つまり三乗のそのままが一乗にはかならないといいうる道理を「逆」として照射するのである。もつとはっきりと表現するならば、「三乗即是一乗」と言いうるような一乗の思想内容を峻拒することを示唆しているのである。従って、親鸞はここで声聞、縁覚、菩薩の三乗の教えが衆生のために説かれるのは、一切の衆生を一仏乗に帰させるためであること、しかも三乗として説かれた教えがそのまま一乗の教えになることはあり得ないことを『涅槃經』によって明示するのである。

先ほど来、『法華經』や『勝鬘經』などに基礎づけられる「諸法実相の理」に対する親鸞の吟味批判の視座を繰り返し確かめてきたが、この『涅槃經』の引文によっても更に明確に、そのことが言表されていると理解することがで

きよう。

次に、『涅槃経』第三の引文を見ていきたい。

又言善男子畢竟有二種^ニ一者莊嚴畢竟^ニ二者究竟畢竟^{ナリ}一者世間畢竟^{ナリ}二者出世畢竟^{ナリ}莊嚴畢竟者六波羅蜜^{ナリ}究竟畢竟者一切衆生所得^ニ一乘^{ナリ}一乘者名・爲佛性^ト以^テ是義故我説^ク一切衆生悉有佛性^ト一切衆生悉有^ニ一乘^ニ以^テ無明覆^ヘ故^ニ不能得^ト見^ニ上^ニ已^ニ也^ト」⁽²⁵⁾

ここでは二種の畢竟についてまず明かしている。

そもそも、畢竟には、「絶対的な」、「究極の」あるいは「さとり、果ての果てまできわめ尽くすこと」という意味がある。また『浄土和讃』「畢竟依」の左訓には、「畢竟」に「オワリ反オワル反ツイニ反キワム反」とあり「畢竟依」に「ホフシン（法身）ノサトリノコルトコロナクキワマリタマヒタリトイフコ、ロナリ」と左訓されている。異なつた文脈であるので、和讃の畢竟の左訓をそのまま「行巻」の一乗釈における意味として同一視することについては慎重でなければならぬが、「さとり」の究められたあり方」として「畢竟」の意義を捉えることはできよう。そうであるなら、六波羅蜜とは、菩薩の修すべき六つの完成行であり、それは莊嚴されたさとりであり方、あるいは世間におけるさとのりあり方として説き明かされている。それに対し、「一切衆生悉有一乘（仏性）」とは、究竟畢竟、つまりこの上なく究め尽くされた仏のさとのりあり方そのものであると言われる。

親鸞の「一切衆生悉有佛性」に対する究明の内容については、ここで詳論できないが、以上のように「究竟畢竟」を「悉有仏性」と明確化した上で、「一切衆生悉有^ニ一乘^ニ以^テ無明覆^ヘ故^ニ不能得^ト見^ニ」と記される「無明」の問題について言明する親鸞の視座について考えておきたい。

親鸞は、一乗釈において、誓願一仏乗こそ、仏のさとりを果ての果てまで究め尽くした究竟畢竟の教えであり、それは一切衆生が得る一乗の法であると明らかにする。それこそ、親鸞が浄土真宗と仰ぐ仏道である。しかし、同時に

親鸞は、あらゆる衆生が得る所の一乗は、無明に覆われているために、私たち衆生には見ることができないという教言を記す。それは釈尊の教言であり、その教言によって言い当てられているのは、正しく一切衆生の相である。

誓願一仏乗の究明において、「以三無明覆^ヘル^ニラ^ニ」^{（一）}故不能^ニ得^ト見^ニ「^{（二）}」といふ、言わば一切衆生の無明の深さをえぐり出す仏言を深く刻み込む所に、親鸞の実存的課題の深さを私たちは真摯に教えられていかななくてはならないだろう。これは、「信巻」及び「真仏土巻」に直結する課題であり、ここでも誓願一仏乗開頭の課題が、「信巻」及び「真仏土巻」にまで緊張感をもって展開されていることを確かめることができよう。

一乗釈における『涅槃経』の最後の引文は、「一乗と無数の法」について述べるものである。

又言云何^{ハク}爲^カスル^ト一切衆生悉^ク一乗^ニ故^ニ云何非^ニ一^ニ説^ニ三^ニ乘^ニ故^ニ云何非^ニ一^ニ非^ニ一^ニ無^ニ數^ニ法^ニ故^ニ上^ニ已^{（三）}

この文の意義は、一切衆生が悉く一乗であるから、一（乗）を説くのであり、衆生のために三乗を説くが故に、仏の教えを「非一」というのであり、更に仏の教えを「非一非非一」とするのは、衆生のために無数の法が説かれるからである、と捉えることができる。

『涅槃経』の引文の第二において明らかにしたように、一切衆生を一乗に帰入させていくことが真実に信順する最も重要なあり方であり、諸仏菩薩は、その一乗に帰入させることを了知しつつ、衆生のために三乗の教えを説くのである。そのことを踏まえると、この引文は、仏が衆生のために教法を説かれる際、それは三乘法といい、無数の法門といい、すべて誓願一仏乗に帰入させるために説かれた教えであるということをも、明確にする意義を持っている。これは、釈尊の一代教に言及し、最終的に「乗中之一乗^{（四）}斯乃眞宗也、已顯眞實行之中^{（五）}畢^{（六）}」^{（七）}と表明する「化身土巻」前半における課題と呼応していることが出来る。

以上、『涅槃経』の四文の意義を見てきたが、一乗釈には更に『華嚴経』の一文が記される。

『華嚴経』言文殊法常爾^{（八）}・法王唯一法^{（九）}・一切无导人^{（一〇）}・一道出^{（一一）}生死^{（一二）}一切諸佛身唯一法身^{（一三）}・一心一智慧^{（一四）}

力无畏亦然（上）^セ^{ナリト}^巳^{（30）}

この『華嚴経』の文意を確かめると、仏教における智慧を象徴する文殊菩薩が仰ぎ究める法とは、常に唯一不二の法であることがまず説かれる。更に、この唯一の法によって、あらゆる仏たちが生死を超えて仏になられたのであり、あらゆる諸仏を生み出す仏法はただ一つなのであるから、すべての諸仏の身も心も智慧も、またあらゆる如来の十方無畏も、すべてこの一法より生れ、一法身におさまるものであることが述べられている。

また、この『華嚴経』の文について押えておくべきことは、一乗釈の直前、他力釈における『論註』からの引文に、重なる部分があることである。『論註』では「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」について、阿耨多羅三藐三菩提の意義を「無上正遍道」と明示し、その中の「道」について

道者先導道也・經言十方先導人・一道出（上）生死（上）一道者一先導道也、先導者謂知（上）生死即是涅槃（上）如是等入不二法門（上）无導相也（31）

と述べる。他力釈では、十方の無碍人つまりあらゆる諸仏たちは、一道より生死を超えていくのであり、その一道とは生死即涅槃を知る智慧に成り立つ無碍道であると確かめられる。更にその一道が速得成就する具体性を、第十八願、十一願、二十二願の三願によって証すのである。

それを受けて、親鸞は一乗釈の最後の引文で、この『華嚴経』の文を引くのである。つまり、他力釈において明らかなとなるのは、如来の本願他力によって成就する誓願の仏道であり、一乗釈では、その誓願の仏道こそ一仏乗という内実を実現するのであり、この誓願一仏乗によって、あらゆる仏が生みだされるのであり、あらゆる衆生が同じく齊しく成仏していくことが根源的に支えられているのであると親鸞は結論するのである。

おわりに

大変、粗雑な考察に終始してしまった。しかし、自ら出遇いえた本願念仏の教えを、「一乗者：唯是誓願一佛乘也」⁽³²⁾とまで言い切らせる親鸞の課題と聞思の営みは、自身の実存的課題を内に深く掘り下げつつ、当時の仏教思想との緊張関係の中で展開されていること、更にそれは『教行信証』全体の撰述と深く連関していることを示唆することはできただけではないかと考える。つまり、一乗積そのものが、『教行信証』の各巻の課題と思索の展開を丁寧にとりながら、「唯是誓願一佛乘也」と言い切れる所まで、聞思の学びを徹底させていけと、私たちによびかけていると言っているのである。

おそらく誓願一仏乘開顕という課題において私たちが見据えねばならない人間の最も根底にある課題は、「以_二无明覆_一故不能_三得_二見_一」^{ヘルツニスト}という点であろう。その事実に対して一点の曖昧さも許すことなく、一切衆生が皆同じく齊しく帰すべき、かつ、その唯一の道によって、一切衆生が成仏し得る仏道の道理を、開顕するということが親鸞の一仏乘開顕の営みである。小論はその課題の解明の出発点をおぼろげに示唆したにすぎない。一乗積が教示する誓願一仏乘開顕の具体的な内実を『教行信証』全体の究明において明らかにすることを、更なる課題としたい。

- (1) 『大正新脩大藏経』（以下『大正藏』と略す）第十二卷 二二〇c—二二二a
- (2) たとえば、智暹『教行信証文類樹心録』には、次のように述べられる。

「大乘者」より下「第一義乘」に至るまでは即ち勝鬘經の文なり。彼には三乗の言無し。いま彼の文を取りて本願一乗を積するなり。いま三乗の字を加う意は四車宗に成すためなり。故に経題を挙げず、但、文を取るなり。

〔真宗全書〕第三六卷 四八頁 原漢文

また、宣明や深励など多くの先達も、同じく一乗積御自釈の文言は『勝鬘經』に依ることを指摘する。

- (3) 『大正蔵』第七四卷 三七一b および 『恵心僧都全集』第二卷 二〇五頁
- (4) 法住は『教行信証金剛録』に以下のように述べる。
 この一乗海の御自釈、全く『一乗要決』下卷に『勝鬘經』を引かせられて、一乗の釈あるのをそのまま出し給えり。ただ終の「唯是誓願一仏乘」の七字が吾祖の御言、その余は『一乗要決』に引かせられた『勝鬘經』の文なり。古来の学者『勝鬘經』に依らせられたと知らぬものはなけれども、『一乗要決』を相承なされたと知らざるは鹿漫なり。
 (『続真宗大系』第七卷 三〇三頁)
- (5) 『定本親鸞聖人全集』(以下『定親全』と略す)第二卷 和讃篇 一三三八頁及び二六二頁参照
- (6) 『大正蔵』第十二卷 二二〇c—二二一a
- (7) 『大正蔵』第七四卷 三二七c 原漢文
- (8) 註(4)参照
- (9) 『定親全』第一卷 七六頁
- (10) 『定親全』第一卷 一五頁
- (11) 『定親全』第一卷 六一頁
- (12) 『定親全』第一卷 六三頁
- (13) 『一乗要決』大久保良順著(大蔵出版) 三二頁
- (14) この問題については、拙稿「法然門下における「弘願一乗」の究明と親鸞の「一乗海釈」」(『大谷学報』(第八九卷)第二号)参照
- (15) 『定親全』第一卷 七六頁
- (16) 『唯信鈔文意』(『定親全』第三卷 和文篇 一七〇頁)
- (17) 拙稿「『坂東本・教行信証』「一乗釈」における御自釈の訓みと意義について」(『真宗研究』第五五輯 六二—四頁)参照
- (18) 『定親全』第二卷 漢文篇 九—一〇頁
 但し、「・」は『影印高田古典』第二卷により加えた。

- (19) 『定親全』第三卷 和文篇 一七一頁
- (20) 同右
- (21) 『定親全』第一卷 七六一―七頁
- (22) 『定親全』第一卷 三七九頁
- (23) 同右
- (24) 『定親全』第一卷 七七頁
- (25) 同右
- (26) 『広説仏教語大辞典』(東京書籍) 一三九―一頁
- (27) 『増補親鸞聖人真蹟集成』第三卷 二二三頁
- (28) 『定親全』第一卷 七七―八頁
- (29) 『定親全』第一卷 二九〇頁
- (30) 『定親全』第一卷 七八頁
- (31) 『定親全』第一卷 七三頁
- (32) 『定親全』第一卷 七六頁